

日本語における子音語幹動詞の形態構造

—語幹拡張母音とする分析—

2015（平成 27）年度入学
言語学・応用言語学専門分野
宮岡 大
（学生番号: 1LT15145P）

2019（平成 31）年 1 月提出

要旨

本論文では、日本語標準語における子音語幹動詞の形態構造について、動詞語幹と接辞のどちらに属するかが問題となる、母音/a/, /i/ を分析する。

日本語標準語の子音語幹動詞では、語根と接辞の間に、母音/a/, /i/ が生じる。

- (1) a. /kakanai/ 「書かない」 b. /kakitai/ 「書きたい」

(1a) /kakanai/ においては、語根//kak-// と否定接辞// -na// との間に、母音/a/ が生じる。この母音/a/ を例にとると、(2)に示す、2つの分析が考えられる。

- | | | | | |
|-----|----|----------------|----|----------------|
| (2) | a. | <i>kakanai</i> | b. | <i>kakanai</i> |
| | | kak-ana-i | | kak-a-na-i |
| | | 書く -NEG-NPST | | 書く -a-NEG-NPST |

問題の母音/a/ について、(2a)は、接辞の頭母音として解釈する分析であり、(2b)は、動詞語幹と接辞を接続する、独立した形態素として解釈する分析である。この問題は、(1b) /kakitai/ において、語根//kak-// と希求接辞// -ta// との間に生じる、母音/i/ についても同様である。

本論文では、先行研究が論じてこなかった観点をもとに、(2a)の分析は採用できず、(2b)の分析が優れていることを論じる。(2a)と(2b)の分析の妥当性を明確に論じることで、日本語形態論における問題を解決する。

目次

要旨	i
目次	ii
1. はじめに	1
2. 前提の導入	2
2.1. 音韻論	2
2.2. 形態論	3
2.3. 例文の表示方法	5
3. 本論文で扱う問題の導入　—子音語幹動詞の形態構造	7
4. 先行研究及びその問題点	8
4.1. Shibatani (1990)	8
4.2. ナロク (1998)	10
4.3. 佐々木 (2016)	10
5. 接辞の頭母音とする分析及びその問題点	12
5.1. 子音始まりの接辞	12
5.2. 接辞の基底形に母音が含まれる分析	12
5.3. 接辞の基底形に母音が含まれない（規則により挿入される）分析	13
6. 動詞語幹と接辞を接続する，独立した形態素とする分析	15
6.1. 不定形	16
6.2. 複合動詞	19
6.3. 変格活用	21
6.4. タ系語尾の形態音韻規則	23
6.4.1. 通時的な説明	23
6.4.2. 共時的な説明	29
7. 動詞の転成名詞化，転成名詞の複合	39
7.1. 単純動詞の転成名詞化	39
7.2. 複合動詞の転成名詞化	42
7.3. 転成名詞の複合	43

8. 対立する従来分析との比較検討	46
8.1. 対立する分析の概要.....	46
8.2. 対立する分析のメリット.....	46
8.3. 対立する分析のデメリット.....	47
9. おわりに	48
9.1. 日本語形態論における本論文の位置づけ	48
9.2. 今後の展望	48
参考文献.....	49

1. はじめに

本論文の目的は、現代日本語標準語（以下、日本語標準語）を対象に、子音語幹動詞の形態構造について、動詞語幹と接辞のどちらに属するかが問題となる母音を分析することである。

第2章では、本論文で前提とする、日本語標準語の音韻論、動詞形態論の概念、例文の表示方法を導入する。

第3章では、本論文で検討する問題を導入する。

第4章では、先行研究が採用する分析を取り上げ、その問題点を指摘する。

第5章では、考えられる分析と、その分析を採用しない根拠を論じる。

第6章では、本論文における分析と、その分析を採用する根拠を論じる。

第7章では、いわゆる連用形を含む名詞について、連用形の形式の構造を述べる。

第8章では、対立する従来 of 分析と、本論文で論じた分析を比較検討する。

第9章では、日本語標準語の動詞形態論における本研究の位置づけと、今後の展望を述べる。

2. 前提の導入

本章では，本論文で前提とする，日本語標準語における音韻論，形態論の用語と日本語標準語における動詞形態論の概念，例文の表示方法を導入する。

2.1. 音韻論

本論文では，// // で基底形 (underlying form) の音素表示，/ / で表層形 (surface form) の音素表示を行う。また本節では，[] で IPA (International Phonetic Alphabet) による音声表示を行う。

日本語標準語の母音音素は，以下の表 1 に示す 5 個である。

表 1. 日本語標準語の母音音素

		+ front	− front
+ high	− low	i	u
− high	− low	e	o
− high	+ low		a

日本語標準語（固有語）の子音音素は，以下の表 2 に示す 14 個である。

表 2. 日本語標準語の子音音素

	両唇		歯茎		硬口蓋	軟口蓋		声門
破裂音	p	b	t	d		k	g	
鼻音		m		n				
弾き音				r				
摩擦音			s	z				h
接近音		w			j			

/j/ は，音節構造において，半母音 (G ; Glide) のスロットにも立つことが可能である。
/n/ が音節の尾子音 (Coda) に立つとき，その/n/ が実現するときの音声は，(3)に示すように，後接する音素に依存する。

(3) 後接する音素による、尾子音/n/ の実現

- a. 両唇の破裂音・鼻音 (/p, b, m/) のとき, [m]
- b. 歯茎の破裂音・鼻音・弾き音 (/t, d, n, r/) のとき, [n]
- c. 軟口蓋破裂音 (/k, g/) のとき, [ŋ]
- d. /s, z, j/ のとき, [i]
- e. /h, w/ のとき, [ũ]
- f. 母音のとき, それぞれの母音の鼻母音
- g. 音素が後接しない (語末) のとき, [N]

子音に後接する母音について、子音/j/ は母音/a, u, o/ (–front) だけが、子音/w/ は母音/a/ だけが、子音/d/ は母音/a, e, o/ (–high) だけが、それぞれ後接する。

母音/u/ に前接する子音について、/tu/ [tsu], /hu/ [ɸu] としてそれぞれ実現する。

母音/i/ に前接する子音について、/ti/ [tei] として実現する。それ以外の子音が前接するときは、子音が口蓋化し、/ki/ [kʲi], /si/ [ɕi], /ni/ [ɲi], /hi/ [çi], /mi/ [mʲi], /ri/ [ɾi], /gi/ [gʲi], /zi/ [zi], /bi/ [bʲi], /pi/ [pʲi] としてそれぞれ実現する。

母音が前接しない子音/z/ について、/a, u, e, o/ が後接するときは[dz], /i/, /j/ が後接するときは[dz] として実現する。

日本語標準語の固有語においては、(4)のように、音素配列における制約があり、以下の音素連続は回避される (Ito and Mester 1995: 819)。

- (4) a. *NT: 鼻音に後接する無声阻害音を回避する制約
- b. *DD: 有声阻害音の連続を回避する制約

2.2. 形態論

始めに、形態論における用語について、本論文における定義を述べる。本論文において形態論は、「語の内部の構造や形成を対象とする」(渡辺 2014) ものである。

語 (word), 接語 (clitic), 接辞 (affix) について、(5)のように定義する。

- (5) a. 語: 形態統語的にも音韻的にも、自立する単位
- b. 接語: 形態統語的には自立し、音韻的には従属する単位
- c. 接辞: 形態統語的にも音韻的にも、従属する単位

接語と接辞は、服部（1950）における、付属語（本論文における接語）と付属形式（本論文における接辞）を見分ける、3つの原則によって認定する。その原則は、(6)に示しておりである。

- (6) a. 【原則Ⅰ】 職能や語形変化の異なる色々の自立形式につくものは自由形式（即ち「付属語」）である。
- b. 【原則Ⅱ】 二つの形式の間に別の語が自由に現れる場合には、その各々は自由形式である。従って、問題の形式は付属語である。
- c. 【原則Ⅲ】 結びついた二つの形式が互いに位置を取りかえて現れ得る場合には、両者ともに自由形式である。

§ 2.3. で後述するように、例文において、接語境界はイコール (=), 接辞境界はハイフン (-) で表示する。

語根 (root), 語幹 (stem), 語基 (base) について、それぞれが意味するところは、研究者によってある程度の揺れがある（渡辺 2014）が、本論文においては Haspelmath and Sims (2010), 渡辺 (2014) などと同様、(7)のように定義する。

- (7) a. 語根: 語から接辞を取り除くと最後に残る、それ以上分析できない形態素
- b. 語幹: 屈折接辞が付与される部分
- c. 語基: 接辞が付与される部分

次に、日本語標準語の動詞形態論について、本論文で用いる概念を導入する。

日本語標準語の動詞形態論においては、動詞語幹に異形態を認めるかどうかについて、(8a)と(8b)のように、大きく2つの立場がある。

- (8) a. 動詞語幹に異形態を認め、接辞によって動詞語幹が交替する立場
- b. 動詞語幹を一つに設定し、接辞による動詞語幹の交替を考えない立場

江畑（2013）では、表3のように、動詞語幹の異形態が4つ設定されており、後接する接辞によってその異形態が交替する、(8a)の立場をとっている。

表 3. 江畑（2013）における，動詞語幹の種別と語基

	音便動詞「読む」	子音動詞「貸す」	母音動詞「起きる」
基本語基	yom-u, yom-e	kas-u, kas-e	oki-ru, oki-ro
第 2 語基	yoN-da, yoN-de	kasi-ta, kasi-te	oki-ta, oki-te
第 3 語基	yoma-naide, yoma-zu	kasa-naide, kasa-zu	oki-naide, oki-zu
第 4 語基	yomi-Ø	kasi-Ø	oki-Ø

しかし，動詞に共通する形式として，動詞語幹を 1 つに設定することができる。表 3 の音便動詞における「第 2 語基」も，その「基本語基」の末子音によって形式が決定される予測可能なものであるため，形態音韻規則によって導き出すことができる（詳しくは，§ 6.4. で論じる）。従って本論文では，江畑（2013）のような(8a)の立場はとらない。Bloch（1946），寺村（1984）などの日本語動詞形態論の先行研究のように，(8b)の立場，すなわち，動詞語幹を一つに設定し，接辞による動詞語幹の交替を考えない立場をとる。

表 4 に示すように，本論文では，母音語幹と子音語幹の 2 つの動詞語幹を設定する。母音語幹は末母音によって 2 つに，子音語幹は末子音によって 9 つに，それぞれ下位分類される。なお，力行・サ行の変格活用動詞については，§ 6.3. で述べる。

表 4. 本論文における，動詞語幹の種類

母音語幹	例	子音語幹	例
i 語幹	oki- 「起きる」	k 語幹	kak- 「書く」
e 語幹	age- 「上げる」	s 語幹	kas- 「貸す」
		t 語幹	kat- 「勝つ」
		n 語幹	sin- 「死ぬ」
		m 語幹	kam- 「かむ」
		r 語幹	kir- 「切る」
		w 語幹	kaw- 「買う」
		g 語幹	kag- 「嗅ぐ」
		b 語幹	tob- 「飛ぶ」

2.3. 例文の表示方法

Lieb and Drude（2000），Lehman（2004）をもとに，下地（2013）は例文表示のレベルを，(9)のように 8 段階で示す。

- (9) 【 Level 1 】 生データ
 【 Level 2 】 音声表記
 【 Level 3 】 音韻表記（あるいは正書法表記）
 【 Level 4 】 形態素分析
 【 Level 5 】 形態素ごとのグロス
 【 Level 6 】 単語ごとのグロス
 【 Level 7 】 全文訳
 【 Level 8 】 更なる詳細情報

本論文では、(9)の Level 3, 4, 5, 7 を表記する、「基本 4 段方式」(下地 2013)を用いて、例文を表示する。ただし、引用における例文は、原典のまま表示する。

- (10) 1 行目 【 Level 3 】 音韻表記 (イタリック)
2 行目 【 Level 4 】 形態素分析
3 行目 【 Level 5 】 形態素ごとのグロス
4 行目 【 Level 7 】 全文訳

本論文で用いる略号は、以下の通りである。

- | | | |
|---|------|-----------------------|
| ● | - | 接辞境界 |
| ● | = | 接語境界 |
| ● | + | 複合における語幹境界 |
| ● | ACC | accusative 対格 |
| ● | DES | desiderative 希求 |
| ● | HYP | hypothetical 仮定 |
| ● | INF | infinitive 不定 |
| ● | IMP | imperative 命令 |
| ● | NEG | negative 否定 |
| ● | NMLZ | nominalization 名詞化 |
| ● | NPST | non-past 非過去 |
| ● | PASS | passive 受動 |
| ● | PST | past 過去 |
| ● | SEQ | sequential 継起 |
| ● | SIM | simultaneous 同時 |
| ● | THM | thematic vowel 語幹拡張母音 |

3. 本論文で扱う問題の導入 ―子音語幹動詞の形態構造

本章では、本論文で扱う問題を導入する。

本論文で扱う問題は、日本語標準語の動詞形態論において、母音語幹動詞と子音語幹動詞とで大きく異なる点である。それは、子音語幹動詞において、語根と接辞の間に、母音 /a/ ないし /i/ が生じるという点である。

(11) 母音語幹動詞 (例: 語根//mi-//)

- a. /minai/ 「見ない」 b. /mitai/ 「見たい」

(12) 子音語幹動詞 (例: 語根//kak-//)

- a. /kakanai/ 「書かない」 b. /kakitai/ 「書きたい」

(12a) /kakanai/ 「書かない」においては、語根//kak-// と否定接辞// -na// の間に、母音/a/ が生じる。この母音/a/ を例にとると、(13)に示すように、2つの分析が考えられる。

(13) /kakanai/ 「書かない」の形態構造の分析方法

- | | | | |
|----|----------------|----|----------------|
| a. | <i>kakanai</i> | b. | <i>kakanai</i> |
| | kak-ana-i | | kak-a-na-i |
| | 書く -NEG-NPST | | 書く -a-NEG-NPST |
| | 「書かない」 | | 「書かない」 |

問題の母音/a/ について、(13a)は、接辞の頭母音として解釈する分析であり、(13b)は、動詞語幹と接辞を接続する、独立した形態素として解釈する分析である。

この問題は、(12b) /kakitai/ 「書きたい」において、語根//kak-// と希求接辞// -ta// との間に生じる、母音/i/ についても同様である。

どちらの分析を採用するにしろ、その根拠が必要である。第4章では、その根拠を議論している先行研究を取り上げ、それには問題があることを示す。第5章では、(13a)の分析は採用できないことを論じる。第6章では、先行研究が論じてこなかった観点から、(13b)の分析が優れていることを論じる。

4. 先行研究及びその問題点

本章では、第3章で導入した、本論文で扱う問題を議論している先行研究を取り上げ、その問題点を述べる。

(13)に示したとおり、子音語幹動詞に生じる問題の母音/a/, /i/ をどう解釈するかについて、(14)の2つの分析方法が考えられる。

- (14) a. 接辞の頭母音として解釈する分析
- b. 動詞語幹と接辞を接続する、独立した形態素として解釈する分析

この問題は、南琉球宮古語伊良部島方言を記述する、下地 (2008)、Shimoji (2008) において初めて明示的に取り上げられ、この方言においては、(14b)の分析が採用されている。

日本語標準語における先行研究でも、(14a)か(14b)の、どちらかの立場がとられている。(14a)の分析は、Bloch (1946)、清瀬 (1971)、寺村 (1984)、鈴木 (1996)、ナロク (1998) など、(14b)の分析は、Shibatani (1990)、佐々木 (2016) などが採用している。

どちらの解釈を採用するかについて、その根拠を議論している先行研究に、Shibatani (1990)、ナロク (1998)、佐々木 (2016) がある。本章では、これらの先行研究を取り上げる。

4.1. Shibatani (1990)

Shibatani (1990) は、日本語の伝統文法における動詞形態論の要素構成を、(15)のような図式に表している。

- (15) $\underbrace{\text{Root} + \text{Inflectional ending}}_{\text{Stem}} \quad (+ \text{Auxiliary}) \mid (+ \text{Particle})$
- (Shibatani 1990: 224)

屈折語尾 (Inflectional ending) は、語幹 (Stem) を構成する要素である。助動詞 (Auxiliary) と助詞 (Particle) は、語幹に直接接続し、語根 (Root) に直接は接続しない、と一般化する (Shibatani 1990: 225)。

問題の母音/a/, /i/ は、屈折語尾に相当する。Shibatani (1990) は、未然形 (irrealis) や

連用形 (adverbial) を形成する屈折語尾を認める, (14b)の分析を採用している。その根拠は, 未然形や連用形というカテゴリを無くすと, 「助動詞は直接語根に接続しない」という一般化に反するためである (Shibatani 1990: 230)。

Shibatani (1990: 233) は, 全ての動詞活用クラスにおいて, 屈折語尾によって未然形を形成した語幹に, 受動接辞や使役接辞が後接すると分析する。受動接辞について, 基底形に//rare// を設定した上で, (16)のような規則によって, 表層形を導く。

(16) 受動接辞//rare// の実現

- a. 母音語幹に接続するとき, 屈折語尾-Ø によって形成された未然形語幹に, /rare/ を後接する (例: /mi-Ø-rare-ru/)
- b. 子音語幹に接続するとき, 屈折語尾-a によって形成された未然形語幹に, /re/ を後接する (例: /kak-a-re-ru/)

しかし, (16)の規則には問題がある。(16b)において, 基底形//rare// における, /ra/ が脱落するが, このことを正当化する理由がない点である。子音語幹において, 屈折語尾-a によって形成された未然形語幹に/rare/ が後接するとき, /arare/ 「あられ」などの語から分かるように, 日本語標準語の音素配列における制約はかからず, 実現可能だからである。例えば, 子音語幹//kak-// 「書く」の未然形語幹/kak-a-/ に, /rare/ も後接することが可能であり, このとき, //rare// の/ra/ が脱落し, /re/ が実現して後接する, 積極的な理由がない (なお, 本論文における受動接辞の実現に関する分析は, § 5.1. で述べる)。

また, Shibatani (1990: 234) は, 否定接辞-nai の実現は(17)のように, 希求接辞-tai の実現は(18)のように, それぞれ分析する。

- | | | | | | |
|------|----|------------|----|-------------|-----------------------|
| (17) | a. | 'see-NEG' | b. | 'die-NEG' | |
| | | mi-Ø + nai | | sin-a + nai | |
| | | [minai] | | [ʃinanai] | |
| | | | | | |
| (18) | a. | 'see-DES' | b. | 'die-DES' | |
| | | mi-Ø + tai | | sin-i + tai | |
| | | [mitai] | | [ʃinitai] | (Shibatani 1990: 234) |

(17)のとおり, 否定接辞-nai は未然形語幹に, (18)のとおり, 希求接辞-tai は連用形語幹に, それぞれ後接する。母音語幹のとき, 未然形を形成する屈折語尾も, 連用形を形成する屈折語尾も-Ø と設定され, 機能が異なるゼロ形態素を複数設定する分析となる。

4.2. ナロク (1998)

ナロク (1998) は、語構成能力の有無という観点から、子音語幹動詞に生じる問題の母音/a/ は(14a)の分析を、母音/i/ は(14b)の分析を採用している。それぞれの根拠は、(19)、(20)に示す。

- (19) yom-a(?)-nai においても、-a- を語幹の一部 (yoma-) とみるか後続要素の異形態の一部 (-ana) とみるかという問題が生ずる。しかし、yoma- は語構成の能力もなく、生産的でもないので、-a- は接尾辞-na- の異形態の一部とみなすのが妥当である。

(ナロク 1998: 15)

- (20) 1) -i- がついた子音動詞の語幹は統語論的に独立した単位としても機能することがある。(例: 歩み) つまり、-i- は語構成の機能も持つ。
2) -i- がついた子音動詞の語幹には {-mas-} 以外にも多くの後続要素がつく。(例: yomi-yagaru, yomi-uru, yomi-kaneru)

1) は、-i- が続く形態素とよりも語幹との結びつきが強いことを示す。もっとも、語構成の能力を持つ-i- と語幹と接尾辞の間に入る-i- を別の形態素とみなすことも可能である。しかし、2) を考慮すると、-i- を語幹の一部とみなした方がはるかに合理的といえる。

(ナロク 1998: 14)

しかし、佐々木 (2012) が指摘するように、いわゆる未然形 ((19)における yoma-) に単語としての独立性がないことは、動詞活用の中での特殊性を示す特徴ではあるが、母音/a/ が独立した形態素として分析できないことの根拠にはならない。

また(14a)の、問題の母音を接辞の頭母音として解釈する分析は、採用できない理由がある。それについては、第5章で論じる。

4.3. 佐々木 (2016)

佐々木 (2016) は、大分県九重方言のデータを取り上げ、西日本の方言で見られる否定形のラ行五段化は、否定接尾辞の変化であるとする。

表 5. 大分県九重方言の動詞語形（糸井 1964 より一部抜粋）

	終止	命令	連用	過去	否定
取る	toru	tore	tori	toQta	toraN
射る	juru	jure	juri	juQta	juraN
見る	miru	mijo	mi	mita	miraN

表 5 のとおり、動詞「見る」について、終止形と否定形以外では、動詞「取る」とは異なる形式が語根に接続している。そのため、動詞「見る」の語根は *mi-* であり、否定形がラ行五段動詞と同様に */...raN/* で終わるのは、この方言の否定接尾辞に *-raN* という異形態が生じた（否定形のラ行五段化）ためであるとする。

否定接尾辞の異形態 *-raN* の成立過程については、(21) のように説明する。

- (21) a. *-raN* よりも古い形式である否定接尾辞 *-N* は、子音一つだけからなる形態素である。これは、モーラを担う要素ではあるものの、それ自体で音節を構成せず、常に先行する形態素末の母音を音節核とするため、音節の依存部に位置づけられる。この点で、*-N* は韻律的に不安定である。
- b. (21a) に示した、否定接尾辞 *-N* の韻律的な不安定性を解消するために、五段動詞の否定形の再分析（*tora-N* を *tor-aN* と再分析）を行った。
- c. 可能動詞のラ抜き現象と並行的に、類推（ラ抜き現象 *tor-e-ru : mi-re-ru* から、*tor-aN : mi-raN* と類推）が働いた結果によって、*-raN* が生じた。

小林（1995）は、動詞の否定非過去形が、*/...nai/* もしくは */...ne:/* に類する形式で終わる方言では、否定形のラ行五段化が生じないことを指摘している。佐々木（2016）は、否定接尾辞が常に 1 音節以上のサイズを持つ東日本の方言では、(21c) に示した類推の前提となる (21b) の再分析が、子音語幹動詞に生じるモチーフが無い場合、否定接尾辞の異形態は生じないと分析する。

(21) の説明は、(21b) から分かるように、(14b) の分析を前提としたものである。一方、*/toranai/* を *tor-ana-i* とする (14a) の分析では、東日本の方言で否定接尾辞の変化が生じないことを予測できない。そのため、母音 */a/* は動詞語幹に属するとする、(14b) の分析を採用している。

以上の根拠から佐々木（2016）は、日本語標準語の動詞形態論において、(14b) の分析を採用する。しかし、表 5 から分かるように、大分県九重方言と日本語標準語では、言語の体系が異なる。従って、大分県九重方言の分析を、そのまま日本語標準語に適用させることはできない。日本語標準語において、どのような根拠によって (14b) の分析が採用されるかは、第 6 章で論じる。

5. 接辞の頭母音とする分析及びその問題点

第4章では、(14a)の分析を採用するナロク（1998）と、(14b)の分析を採用する Shibatani（1990）、佐々木（2016）を取り上げた。

本章では、ナロク（1998）が採用する(14a)の分析を詳しく検討し、この分析が採用できないことを示す。

5.1. 子音始まりの接辞

子音始まりの受動接辞//rare// などは、(22)に示す形態音韻規則によって、表層形を導くことができる。

(22) 受動接辞//rare// の実現

- a. 母音語幹に接続するとき、基底形のまま、/rare/ で実現する
- b. 子音語幹に接続するとき、日本語標準語で許容されない子音連続を避けるため、基底形の頭子音/r/ が脱落し、/are/ で実現する

子音語幹に、受動接辞//rare// のような子音始まりの接辞が接続するときは、日本語標準語で許容されない子音連続を避けるため、接続する接辞の頭子音が脱落する。このような分析は、McCawley（1968）、清瀬（1971）をはじめとする、多くの先行研究が採用している。

現在問題としている、子音語幹動詞に見られる母音も、(14a)に示したとおり、接辞の一部であるとする分析が可能である。すなわち、接辞の基底形の頭母音であると定め、母音語幹に接続するときはそれが脱落する分析である。また、接辞の基底形の頭母音としては設定せず、子音語幹に接続するときに、接辞の先頭に母音を挿入する分析も考えられる。前者は § 5.2. で、後者は § 5.3. で、それぞれ検討する。

5.2. 接辞の基底形に母音が含まれる分析

(14a)の解釈を採用した場合について、否定接辞の基底形を//ana// と設定する分析を考える。この場合、否定接辞//ana// は、以下の(23)のような規則によって実現する。

(23) 否定接辞 //ana// の実現

- a. 母音語幹に接続するとき、基底形の頭母音/a/ が脱落し、/na/ で実現する
- b. 子音語幹に接続するとき、基底形のまま、/ana/ で実現する

(23a)において、否定接辞の基底形//ana// の頭母音が脱落するが、このことを正当化する理由がない。母音語幹の末母音は/i/, /e/ であるが、母音語幹と否定接辞の基底形//ana// が接続したときに生じる母音連続/ia/, /ea/ は、(24)のように、日本語標準語で許容される。

- (24) a. /ia/ の例: siawase (幸せ), kiai (気合い)
b. /ea/ の例: deai (出会い)

同様に、動詞語根と接辞との間に、母音/i/ が生じる場合を考える。例として、希求接辞を取り上げ、その基底形を//ita// とする。母音語幹と希求接辞の基底形//ita// が接続したときに生じる母音連続/ii/, /ei/ も同様に、(25)のように、日本語標準語で許容される。

- (25) a. /ii/ の例: tiisai (小さい), sii (恣意)
b. /ei/ の例: keei (経緯)

また、否定接辞の基底形に//ana//、希求接辞の基底形//ita// を設定した場合、否定接辞や希求接辞の異形態を認めなければならないという、経済性の観点におけるデメリットもある。

以上の理由により、(14a)の解釈のうち、問題とする母音を接辞の基底形の頭母音とし、母音語幹に接続するときに頭母音が脱落する分析は、採用できない。

5.3. 接辞の基底形に母音が含まれない（規則により挿入される）分析

(14a)の解釈を採用した場合について、ここでは、否定接辞の基底形を//na// と設定し、問題の母音は規則によって挿入される分析を考える。この場合、否定接辞//na// は、以下の(26)のような規則によって実現する。

(26) 否定接辞//na// の実現

- a. 母音語幹に接続するとき、基底形のまま、/na/ で実現する
- b. 子音語幹に接続するとき、基底形の先頭に/a/ を挿入し、/ana/ で実現する

(26b)において、否定接辞の基底形//na//の先頭に/a/を挿入するが、このことを正当化する理由がない。

子音語幹の末子音と、否定接辞の基底形の頭子音/n/の子音連続が、日本語標準語で許容されないため、母音が挿入される。しかし、日本語標準語で許容される音素連続をつくるためであれば、挿入されるのは、/a/、/i/、/u/、/e/、/o/のいずれの母音でも差し支えないはずである。つまり、(26b)のときに/a/を挿入することを、音韻的に予測・説明することができない。

同様に、動詞語根と接辞との間に、母音/i/が生じる場合を考える。例として、希求接辞を取り上げ、その基底形を//ta//とする。このとき、動詞語根と接辞との間に/i/を挿入する分析においても、そのときに/i/を挿入することを、音韻的に予測・説明することができない。

また、(23)の分析同様、否定接辞や希求接辞の異形態を認めなければならないという、経済性の観点におけるデメリットもある。

以上の理由により、(14a)の解釈のうち、子音語幹に接続するときに、接辞の基底形の先頭に問題とする母音が挿入されるとする分析は採用できない。

6. 動詞語幹と接辞を接続する，独立した形態素とする分析

第5章では，子音語幹動詞に見られる問題の母音は接辞の一部であるという，(14a)の分析は採用できないことを示した。

本章では，動詞語幹と接辞を接続する，独立した形態素であるとする，(14b)の分析を検討し，これを採用する根拠を述べる。

子音語幹//kak-//「書く」について，(14b)の解釈における，否定形/kakanai/の分析を(27a)に，希求形/kakitai/の分析を(27b)に，それぞれ示す。

- | | | | |
|---------|--|----|--|
| (27) a. | <i>kakanai</i>
[kak-a] _{拡張語幹} -na-i
書く -THM -NEG-NPST
「書かない」 | b. | <i>kakitai</i>
[kak-i] _{拡張語幹} -ta-i
書く -THM -DES-NPST
「書きたい」 |
|---------|--|----|--|

子音語幹動詞に見られる問題の母音は，通言語的に語幹拡張母音（thematic vowel）とよばれる（Bickel and Nichols 2007: 203）。これは，印欧諸語（Grundt 1978），オセアニア諸語（Lichtenberk 1983），コーカサス諸語（Kibrik 1991）などにみられるものである。以下，語幹拡張母音は，例文表示のグロスにおいて，THM とする。

語幹拡張母音は，動詞語幹と接続することで，拡張語幹（extended stem）を形成するものである。

語幹拡張母音は，動詞の活用クラスによって，出現するかどうか決定される（Bickel and Nichols 2007: 202）。日本語標準語においては，子音語幹においてのみ，語幹拡張母音が出現する。

語幹拡張母音のうち，どの母音が出現するかは，語幹拡張母音に後接する形態素によって決定される（Bickel and Nichols 2007: 202）。日本語標準語における語幹拡張母音には，/a/，/i/ の2つを設定する。語幹拡張母音/-a/ を指定する形態素の例を表6に，語幹拡張母音/-i/ を指定する形態素の例を表7に，それぞれ示す。

表 6. 語幹拡張母音/-a/ を指定する形態素の例

形式	意味
-na	NEG
-zu	NEG
-neba	NEG.HYP

表 7. 語幹拡張母音/-i/ を指定する形態素の例

形式	意味
-ta	DES
-mas	POL
-nagara	SIM

なお, § 6.2. で論じる, 子音語幹が複合動詞の前部要素になる場合や, 第 7 章で論じる, 子音語幹が転成名詞化する場合においても, その子音語幹は, 語幹拡張母音/-i/ によって拡張語幹を形成する。

以上のような分析を, 本論文では「語幹拡張母音分析」とよぶ。以下では, 語幹拡張母音分析が優れている根拠を述べる。

語幹拡張母音分析は, (27)のような場合だけではなく, 複数の現象において適用できる。以下では, (14a)の分析では説明できず, 語幹拡張母音分析を採用することで, 母音語幹と子音語幹において統一的な振る舞いとして説明できる現象を示す。

6.1. 不定形

本節では, 不定形 (infinitive) を取り上げる。本論文においては, (28)のような, 複文における従属節 (subordinate clause) に生じる形式を, 不定形とよぶ。

- (28) a. motio tabe kaeru.
 moti=o tabe-Ø kaer-ru
 餅=ACC 食べる-INF 帰る-NPST
 「餅を食べ, 帰る。」【母音語幹】
- b. namaeo kaki kaeru.
 namae=o kak-i-Ø kaer-ru
 名前=ACC 書く-THM-INF 帰る-NPST
 「名前を書き, 帰る。」【子音語幹】

本論文では(28)のとおり, 不定接辞として//Ø// (ゼロ形態素) を設定する。このように, 音形のないゼロ形態素を設定する根拠を論じる。

ここで, Bybee (1985), Bickel and Nichols (2007), Haspelmath and Sims (2010) などが論じるように, 統語的環境 (syntactic environment) を考える。

統語的環境について、上述したように、不定形の形式は従属節において生じる。不定形を始めとする従属節に生じる動詞の形式を、母音語幹//tabe-//「食べる」を例に、表 8 に示す。

表 8. 母音語幹//tabe-//「食べる」が従属節に生じるときの形式例

/tabe/	「食べ、」
/tabereba/	「食べれば、」
/tabetutu/	「食べつつ、」
/tabenagara/	「食べながら、」

表 8 に示すとおり、/tabe/ という形式は、/tabereba/、/tabetutu/、/tabenagara/ などとともに、従属節を形成する。このとき、/tabe/ という形式は、//reba//、//tutu//、//nagara// などと同様に、語幹//tabe-// に不定の意味をもつ接辞//Ø// が後接していると考えられる。従って、従属節を形成する際に、母音語幹に後接する接辞として、//reba//、//tutu//、//nagara// などと並行的に、不定接辞に//Ø// を設定する。

次に、子音語幹のときを考える。子音語幹//kak-//「書く」の不定形は、/kaki/ であるが、この形式の形態構造の分析には、(29a)(29b)の 2 つが考えられる。

(29) /kaki/ 「書き、」 の形態構造の分析方法

a.	<i>kaki</i>	b.	<i>kaki</i>
	kak-i		kak-i-Ø
	書く-INF		書く-THM-INF
	「書き、」		「書き、」

(29a)は、//i// が不定接辞であるとする分析である。一方(29b)は、/i/ を語幹拡張母音とし、//Ø// が不定接辞であるとする分析である。このうち、どちらの分析を採用するかを議論し、(29b)の分析を採用することを示す。

表 9 に、従属節に生じる子音語幹動詞の形式を、//kak-//「書く」を例に示す。

表 9. 子音語幹//kak-//「書く」が従属節に生じるときの形式例

/kaki/	「書き、」
/kakeba/	「書けば、」
/kakitutu/	「書きつつ、」
/kakinagara/	「書きながら、」

ここで仮に、//i// が不定接辞であるとする、(29a)の分析を採用した場合を考える。この場合、表 9 の/kakitutu/、/kakinagara/ は、不定形/kaki/ の形式に、//tutu//、//nagara// が後接していると考えられる。そのときの構造を示したのが、(30)である。

- | | | | | |
|------|----|-----------------|----|-------------------|
| (30) | a. | <i>kakitutu</i> | b. | <i>kakinagara</i> |
| | | kak-i-tutu | | kak-i-nagara |
| | | 書く-INF-SIM | | 書く-INF-SIM |
| | | 「書きつつ、」 | | 「書きながら、」 |

しかし、(30)の分析を採用すると、従属節を形成する接辞のスロットが、線形順序において 2 つ横並びになる。(29a)と対照すると、表 9 の同じ統語的環境に出現する形式のうち、/kaki/と、/kakitutu/、/kakinagara/ が、異なる構造をとることになる。

そこで、(30)に見られる母音/i/ は、(31)のように語幹拡張母音であると分析し、それと並行的に、不定形は(29b)に示したとおり、/i/ は語幹拡張母音であり、//Ø// が不定接辞であると分析する。

- | | | | | |
|------|----|-----------------|----|-------------------|
| (31) | a. | <i>kakitutu</i> | b. | <i>kakinagara</i> |
| | | kak-i-tutu | | kak-i-nagara |
| | | 書く-THM-SIM | | 書く-THM-SIM |
| | | 「書きつつ、」 | | 「書きながら、」 |

従って、子音語幹に後接する接辞としても、不定接辞として//Ø// を設定し、このとき、語幹拡張母音/i/ を要求すると分析する。

以上のとおり、不定接辞は(32)に示すように、動詞の活用クラスによらず//Ø// と設定する。子音語幹に後接するときは、語幹拡張母音/i/ を要求すると分析する。

- | | | | | |
|------|----|-------------|----|-------------|
| (32) | a. | <i>tabe</i> | b. | <i>kaki</i> |
| | | tabe-Ø | | kak-i-Ø |
| | | 食べる-INF | | 書く-THM-INF |
| | | 「食べ、」 | | 「書き、」 |

(28)において、仮に(14a)の分析を採用した場合、子音語幹のときに生じる母音/i/ は、後続する要素の頭母音であるとは分析できないため、別の形態素として分析するか、子音語幹の後に挿入されると分析する。

前者の場合、(29a)か(29b)のような構造となる。(29a)の分析には、前述のように問題があり、(29b)の分析は、本論文で採用する分析である。

後者の場合、§ 5.3. で述べたとおり、他の母音ではなく、/i/ を挿入することを予測・説明することができない。

以上の理由により、不定形において(14a)の分析は採用せず、(14b)の分析を採用する。

動詞の転成名詞は、不定形と同じ形式である。しかし、これは不定形と同じ構造であるとは分析せず、語幹拡張母音によって形成された拡張語幹が、名詞化すると分析する。これについては、§ 7.1. で論じる。

6.2. 複合動詞

本節では、複合動詞を取り上げる。(33)に示すように、複合動詞の前部動詞が子音語幹であるとき、前部動詞は語幹拡張母音/-i/ によって拡張語幹を形成すると分析する。

- (33) *nomiaruku*
 [nom-i]拡張語幹 +aruk-ru
 飲む-THM +歩く -NPST
 「飲み歩く」

影山（1993: 78）は、複合動詞を、「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」に分類するが、(33)の例は「語彙的複合動詞」である。これは、意味においては様々な程度に不透明化や語彙化が進んでおり、生産性は後部動詞に大きく依存するものである。

一方、「統語的複合動詞」は、意味においては前部動詞と後部動詞の意味関係は、完全に透明かつ合成的であり、語彙的な制限を受けずに形成される。

宮岡（2002: 94, 2015: 212）は、統語的複合動詞の後部要素は接尾辞であるとする。ここにおいても、(33)と同様、前部動詞が子音語幹であるとき、それは語幹拡張母音/-i/ によって拡張語幹を形成すると分析することができる。

- (34) *nomihazimeru*
 [nom-i]拡張語幹 -hazime-ru
 飲む-THM -始める -NPST
 「飲み始める」

複合動詞の前部要素と後部要素は、どちらも動詞語幹である。従って、影山（1999）が述べるように、(33)(34)のような複合動詞は、それ全体で1語となる。

(35)(36)のように、前部要素と後部要素との間に、助詞などの別の語を挿入することができない。

- | | | | | |
|------|----|-------------------|----|-------------------|
| (35) | a. | *nomi=wa aruku | b. | *nomi=mo aruku |
| | | 「飲みは歩く」 | | 「飲みも歩く」 |
| (36) | a. | *nomi=wa hazimeru | b. | *nomi=mo hazimeru |
| | | 「飲みは始める」 | | 「飲みも始める」 |

また、(37)(38)のように、複合動詞は、前部要素と後部要素のアクセントを保持せず、複合語アクセントを形成し、アクセント核は複合動詞全体で1つとなる。(37)(38)では、アクセントの上がり目は[で、下がり目は] で、それぞれ表示する。

- | | | | | | | |
|------|----|-------|----|-----------|----|----------------|
| (37) | a. | no]mu | b. | a[ru]ku | c. | no[miaru]ku |
| | | 「飲む」 | | 「歩く」 | | 「飲み歩く」 |
| (38) | a. | no]mu | b. | ha[zimeru | c. | no[mihazime]ru |
| | | 「飲む」 | | 「始める」 | | 「飲み始める」 |

以上のことから、複合動詞は、それ全体で1語となり、前部要素と後部要素はそれぞれ動詞語幹であると分析する。

(33)の拡張語幹は、§ 6.1. で述べた不定形や、動詞の転成名詞化と、形式は同じであるが、それらの形態構造とは異なる。

(33)の前部要素において、不定形の構造をとると仮定すると、前部要素が屈折接辞// \emptyset //をとり、前部要素だけで1語となる。それは、複合動詞は全体で1語であるという、上述したことに反する。

(33)の前部要素において、動詞の転成名詞化の構造をとると仮定すると、前部要素が名詞語幹となる。それは、(35)(36)に示される、前部要素が項の位置に立っていないということに反する。動詞の転成名詞化の詳細は、§ 7.1. で論じる。

以上の理由により、(33)の前部要素は、不定形、動詞の転成名詞化とは、異なる構造であると分析する。

(33)において、仮に(14a)の分析を採用した場合、母音/i/ は、後部動詞の頭母音であると分析するか、複合動詞を形成するときに前部動詞と後部動詞との間に挿入されると分析する。

前者の場合、全ての動詞語幹に対して、母音/i/ を頭母音として含む、複合動詞形成のための異形態を設定する必要がある。そうでなければ、母音/i/ を別の形態素として設定せざるをえず、結果的に(33)のような分析となる。

後者の場合、§ 5.3. で述べたとおり、他の母音ではなく、/i/ を挿入することを予測・説明することができない。

以上の理由により、複合名詞においても(14a)の分析は採用せず、(14b)の分析を採用する。

6.3. 変格活用

本節では、変格活用を取り上げる。変格活用動詞「来る」「する」について、「来る」であれば、/ko-/ ~ /ki-/ ~ /ku-/, 「する」であれば、/s-/ ~ /si-/ ~ /su-/ ~ /se-/ のように、後続する接辞によって語幹が交替すると考える。

これをふまえると、動詞「来る」「する」の否定形と希求形は、(39)(40)に示す構造であると分析する。

- | | | | | |
|------|----|--------------|----|--------------|
| (39) | a. | <i>konai</i> | b. | <i>kitai</i> |
| | | [ko]語幹 -na-i | | [ki]語幹 -ta-i |
| | | 来る -NEG-NPST | | 来る -DES-NPST |
| | | 「来ない」 | | 「来たい」 |
| (40) | a. | <i>sinai</i> | b. | <i>sitai</i> |
| | | [si]語幹 -na-i | | [si]語幹 -ta-i |
| | | する -NEG-NPST | | する -DES-NPST |
| | | 「しない」 | | 「したい」 |

(39)(40)において、仮に(14a)の分析を採用した場合、「来る」の語根//k-// や、「する」の語根//s-// に、接辞が後接するとした上で、変格活用において交替する語幹内の母音は、接辞の頭母音であると分析するか、語根と接辞の間に挿入されると分析する。

前者の場合、変格活用の動詞語根に後接するための形態として、否定接辞には/-ona/, /-ina/, 希求接辞には/-ita/ のように、接辞の異形態を設定する必要がある。

後者の場合、§ 5.3. で述べたとおり、他の母音ではなく、該当の母音が挿入されること

を予測・説明することができない。

動詞「来る」の語根//k-// や、動詞「する」の語根//s-// に、接辞が後接するとし、変格活用において交替する語幹内の母音は、語幹拡張母音であるとする、(14b)の分析も考えられる。

§ 5.1. で論じたような、子音始まりの接辞は、子音語幹に後接するときも語幹拡張母音を必要とせず、接辞の頭子音が脱落すると分析する。変格活用において(14b)の分析をとると、//k-o-rare-ru// のように、変格活用のときのみ語幹拡張母音を必要とする分析となる。また、/a/, /i/ のみならず、否定接辞//na// が指定する/o/ などを、語幹拡張母音に設定せねばならないという、経済性の観点におけるデメリットもある。

以上の理由により、変格活用において、(14a)(14b)の分析は採用せず、(39)(40)に示すように語幹が交替すると考える。

ここで、動詞「来る」について、語幹/ko-/ に後接する形態素を、表 10 に示す。

表 10. 語幹/ko-/ に後接する形態素の例

形式	意味
-na	NEG
-zu	NEG
-neba	NEG.HYP
-i	IMP

これは、表 6「語幹拡張母音/-a/ を指定する形態素の例」にほぼ対応する。同様に、語幹/ki-/ に後接する接辞を、表 11 に示す。

表 11. 語幹/ki-/ に後接する形態素の例

形式	意味
-ta	DES
-mas	POL
-nagara	SIM

これは、表 7「語幹拡張母音/-i/ を指定する形態素の例」に対応する。

このように、語幹拡張母音分析を採用することによって、変格活用動詞「来る」において、交替するそれぞれの語幹に後接する接辞を、子音語幹に接続するとき語幹拡張母音を要求する接辞の集合として、説明することができる。

6.4. タ系語尾の形態音韻規則

本節では，過去//*-ta*// など特定の接辞が，動詞語幹に後接する場合を取り上げる。

子音語幹に，寺村（1984，1997）の「タ系語尾」（*-ta*，*-taroo*，*-tara*，*-te*，*-tari*）が後接するとき，語幹末子音と接辞頭子音に，形態音韻的交替が起きる。この交替は，動詞の語幹末子音によって異なる。以下の表 12 に，子音語幹の語幹末子音それぞれにおける，タ系語尾（表 12 は過去//*-ta*// で代表）と接続したときの表層形の実現を示す。

表 12. 子音語幹とタ系語尾//*-ta*// の接続

子音語幹			// <i>-ta</i> // 接続後の 表層形
k 語幹 ¹	kak-	「書く」	/kaita/
s 語幹	kas-	「貸す」	/kasita/
t 語幹	kat-	「勝つ」	/katta/
n 語幹	sin-	「死ぬ」	/sinda/
m 語幹	kam-	「噛む」	/kanda/
r 語幹	kir-	「切る」	/kitta/
w 語幹	kaw-	「買う」	/katta/
g 語幹	kag-	「嗅ぐ」	/kaida/
b 語幹	tob-	「飛ぶ」	/tonda/

本節では，この形態音韻的交替を説明する規則を設定する。その際，この形態音韻的交替が成立した，通時的な変化を導入することが必要となる。

従って，§ 6.4.1. では，この形態音韻的交替を通時的に説明し，§ 6.4.2. では，それに基づいて，形態音韻的交替を共時的に説明する。

6.4.1. 通時的な説明

本節では，表 12 の形態音韻的交替を，通時的に説明する。

¹ 例外として，k 語幹//ik-//「行く」は，//*-ta*// と接続するとき，/itta/ と実現し，その他のタ系語尾が後接するときも，同様の振る舞いをする（/ittaroo/，/ittara/，/itte/，/ittari/）。

表 12 の形態音韻的交替は、いわゆる音便とよばれる、通時的な変化によって成立した現象である。どのような通時的な変化を経て現在の体系となったのか、同じ振る舞いをする語幹末子音ごとに述べる。

迫野 (1971: 114) は、音便形、非音便形が混用されている文献では、その非音便形が文語的な表記であるのか、実際にそのような形があり得たのか、判別する手段はないため、文献における表記の面から、当時の口頭語の世界において音便がどのような位置を占めていたかを推察することは、不可能に近いとする。

従って本節では、文献で確認できる、非音便形が用いられる最古の用例と、音便形が用いられる最古の用例であると、先行研究において言及されている用例をあげるのみにとどめる。また、現在と同様の形式が定着した時代に関しては、先行研究の言及を引用するのみにとどめる。

以下、奈良時代の近畿方言を反映していると考えられる、『万葉集』(759 年成立) の用例は、国立国語研究所 (2017) からのものである。また、用例において、タ系語尾は全て、継起//te// で代表させる。

6.4.1.1. k 語幹・g 語幹

本節では、k 語幹、g 語幹の音便形の変遷を述べる。

『万葉集』においては、いわゆる連用形にタ系語尾が接続している用例しかなく、音便形の用例はない。カ行四段 (現在の k 語幹) の用例を(41)に、ガ行四段 (現在の g 語幹) の用例を(42)に、それぞれ示す。

- (41) a. 飛ぶ鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ
(万葉集巻 1: 66)
- b. 玉葛花のみ咲きて成らざるは誰が恋ならめ我は恋ひ思ふを
(万葉集巻 2: 88)
- (42) a. 妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあらましを
(万葉集巻 2: 84)
- b. 夕星も通ふ天道を何時までか仰ぎて待たむ月人をとこ
(万葉集巻 10: 78)

築島 (1978: 365) によると、平安時代初期から、カ行四段、ガ行四段において、イ音便の形式が生じている。カ行四段の例を(43)に、ガ行四段の例を(44)に、それぞれ示す。

(43) (抛) おいて 『金光明最勝王經』(830 年)

(44) (次) ついて 『願經四分律』(810 年)

イ音便の定着について、土井(1935: 61)は、「室町時代になって、カ行サ行及びガ行の四段活用動詞の連用形は話言葉に於て「い」の語尾をとるのが本體となった」とする。迫野(1971: 122)は、「カ行イ音便の性格の変化がおよそ鎌倉時代前後に起ったらしい」という推定にとどめ、それ以上の判断を保留している。

6.4.1.2. s 語幹

本節では、s 語幹の音便形の変遷を述べる。

『万葉集』においては、現代日本語標準語と同様、いわゆる連用形にタ系語尾が接続している用例しかなく、音便形の用例はない。サ行四段(現在の s 語幹)の用例を(45)に示す。

- (45) a. 居明かして君をば待たむぬばたまの我が黒髪に霜は降るとも
(万葉集巻 2: 80)
- b. 思ふらむ人にあらなくにねもころに心尽くして恋ふる我かも
(万葉集巻 4: 343)

築島(1978: 367)によると、(46)に示すように、平安時代中期から、サ行四段において、イ音便の形式が生じている。

- (46) a. (下) くだいて 『守護国界主陀羅尼經』(900 年)
- b. (臥) ふいて 『守護国界主陀羅尼經』(900 年)
- c. (脅) おびやかいて 『大唐西域記』(950 年)

奥村(1968)は、サ行イ音便の衰退を、「概ね徳川前期から中期頃」とし、「京阪語史におけるサ行イ音便は《室町期～元禄期の間に著しく減少し、宝暦頃には既に、現代語と同様、差ス等の化石形を除いて殆ど衰退していた》」と分析する。

『版本狂言記』を調査した大倉(1995)は、「十七世紀半ばには、京都方言から「さす」以外のイ音便形はほとんど衰退していた」と分析する。依田(2005)は、「中央語において

サ行四段動詞イ音便は「さす」を除き 17 世紀半ば頃に衰退した」と、大倉（1995）に沿う分析をする。

6.4.1.3. t 語幹・r 語幹・w 語幹

本節では、t 語幹、r 語幹、w 語幹の音便形の変遷を述べる。

『万葉集』においては、いわゆる連用形にタ系語尾が接続している用例しかなく、音便形の用例はない。タ行四段（現在の t 語幹）の用例を(47)に、ラ行四段（現在の r 語幹）の用例を(48)に、ハ行四段（現在の w 語幹）の用例を(49)に、それぞれ示す。

- (47) a. 香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に來し印南国原
(万葉集卷 1: 33)
- b. み吉野の玉松が枝は愛しきかも君がみ言を持ちて通はく
(万葉集卷 2: 141)
- (48) a. 葦辺行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕は大和し思ほゆ
(万葉集卷 1: 61)
- b. 大船の津守が占に告らむとはまさしに知りて我が二人寝し
(万葉集卷 2: 91)
- (49) a. 宵に逢ひて朝面なみ名張にか日長き妹が廬りせりけむ
(万葉集卷 1: 59)
- b. 我が御門千代とことばに榮えむと思ひてありし我し悲しも
(万葉集卷 2: 124)

築島（1978: 379）、柳田（2015: 58）によると、平安時代初期から、タ行四段、ラ行四段、ハ行四段において、促音便の形式が生じている。タ行四段の例を(50)に、ラ行四段の例を(51)に、ハ行四段の例を(52)に、それぞれ示す。

なお、築島（1978: 328）によると、平安時代は促音を表記しないことが多く、表記するようになったのは院政時代である。

- (50) a. (謬) あやまて 『大唐三蔵玄奘法師表啓』（850 年）
b. (持) もて 『地藏十輪經』（883 年）

- (51) a. (巳) をはて 『地蔵十輪經』(883 年)
 b. (妄) いつはりて 『地蔵十輪經』(883 年)

- (52) (救) すくて 『金光明最勝王經』(830 年)

築島(1978: 461)によると、(53)に示すように、ハ行四段は、平安時代後期から、音便の形式としてウ音便も生じるようになる。

- (53) a. (応) かなうて 『大日經』(1000 年)
 b. (湛) たたうて 『大日經』(1000 年)

柳田(2010: 32-43)によると、室町時代、江戸時代初期の東国資料において、ハ行四段の音便形は、促音便とウ音便の両方が生じ、後者の方が優勢であるが、江戸時代後期の東国資料において、ハ行四段の音便形は、促音便とウ音便の両方が生じるが、前者の方が優勢である。柳田(2010)は、この江戸時代後期において、ハ行四段の音便形は、促音便に移行したと分析する。

ラ行四段の促音便の定着について、出雲(1980)は、「口頭語におけるラ行四段活用動詞の音便形の固定化は、キリシタン資料によれば、室町時代末期には完成していたとみられる」とする。

6.4.1.4. m 語幹・b 語幹

本節では、m 語幹、b 語幹の音便形の変遷を述べる。

『万葉集』においては、いわゆる連用形にタ系語尾が接続している用例しかなく、音便形の用例はない。マ行四段(現在の m 語幹)の用例を(54)に、バ行四段(現在の b 語幹)の用例を(55)に、それぞれ示す。

- (54) a. 燃ゆる火も取りて包みて袋には入るといはずやも智男雲
 (万葉集巻 2: 115)
 b. 妻もあらば摘みて食べまし沙弥の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや
 (万葉集巻 2: 149)

- (55) a. 大伴の名に負ふ鞞帯びて万代に頼みし心いづくか寄せむ
 (万葉集巻 3: 262)

- b. 月夜よし川の音清しいざここに行くも行かぬも遊びて行かむ

(万葉集卷 4: 309)

築島（1978: 376-377）によると、(56)のように、マ行四段は平安時代初期から、(57)のように、バ行四段は平安時代中期から、撥音便の形式が生じている。

- (56) (跨) あふつくむて 『大唐三蔵玄奘法師表啓』(850 年)

- (57) (歴) えらむて 『漢書楊雄伝』(948 年)

築島（1978: 461）によると、その後平安時代後期から、マ行四段に、音便の形式としてウ音便が生じる。

- (58) a. (恃) たのうて 『法華義疏』(1002 年)
b. (摘) つうて 『法華義疏』(1002 年)

柳田（2015: 58）によると、マ行四段のウ音便は、江戸時代には撥音便に回帰した。バ行四段においてもマ行四段と同様に、平安時代後期から、音便の形式としてウ音便が生じ、江戸時代には撥音便に回帰した。

6.4.1.5. 通時的な説明のまとめ

§ 6.4.1.1. ～ § 6.4.1.4. で述べたように、子音語幹の語幹末子音によって、音便が成立した通時的な変化は異なる。

しかし、全ての語幹末子音において共通しているのは、音便の形式が生じる以前である奈良時代においては、いわゆる連用形の形式に、継起//te// が後接しているという点である。この、いわゆる連用形の形式は、子音語幹に語幹拡張母音/-i/ が後接して形成される、拡張語幹と同じ構造である。その形式に、タ系語尾が後接していたことを示した。

§ 6.4.2. では、表 12 に示すタ系語尾の形態音韻的交替を、共時的に説明する。そのとき、基底形においては、通時の変化が生じる前のように、語幹末子音にかかわらずタ系語尾は語幹拡張母音/-i/ を要求する、と設定する。また、共時的な形態音韻規則の根拠の一部は、通時の変化であると分析する。

6.4.2. 共時的な説明

本節では、表 12 の形態音韻的交替を、共時的に説明する。

始めに、表 12 の形態音韻的交替を説明する先行研究を取り上げ、その問題点を指摘する。その後、先行研究の問題点を解決するため、語幹拡張母音分析を用いた上で、形態音韻規則を設定する。

6.4.2.1. 先行研究及びその問題点

本節では、表 12 の形態音韻的交替を、共時的に説明する先行研究を取り上げ、その問題点を指摘する。

§ 2.2. で述べたように、タ系語尾が後接するための語幹を設定する立場がある。三上（1955）は「単純語幹」と「完了語幹」を、鈴木（1972）は「基本語幹」と「音便語幹」を、益岡・田窪（1992）は「基本系語幹」と「タ系語幹」を、それぞれ設定する。これらの先行研究は、子音語幹において、語幹の種類が 2 つあるとする。

設定されている、タ系語尾が後接するときの語幹は、表 13 に示すとおりである。

表 13. タ系語尾が後接するときの語幹

タ系語尾が 後接する語幹			
k 語幹	kak-	「書く」	kai-
s 語幹	kas-	「貸す」	kasi-
t 語幹	kat-	「勝つ」	kat-
n 語幹	sin-	「死ぬ」	sin-
m 語幹	kam-	「噛む」	kan-
r 語幹	kir-	「切る」	kit-
w 語幹	kaw-	「買う」	kat-
g 語幹	kag-	「嗅ぐ」	kai-
b 語幹	tob-	「飛ぶ」	ton-

その交替が規則的かつ予見可能で、それぞれの動詞について 2 つの語幹を設定する手間は不要であるという理由から、寺村（1984, 1997）は、語幹の種類は一つとし、子音語幹

にタ系語尾が後接するとき、(59)のような形態音韻的交替が起こる、としている²。

(59) 語幹末子音に、次のような形態音韻的交替が起こる

k	→	i
s	→	si
r	→	t
m	→	n
r	→	t
w	→	t
g	→	i

なお、g, m, n のときは、タ系語尾の初めの -t が有声化して、-d になる
(oyog-u→oyoi-da)

しかし、寺村（1984）も述べるように、語幹末が/s/ のとき、それが/si/ に交替する理由や、語幹末が/k/, /g/ のとき、それが母音/i/ に交替する理由は説明されておらず、(59)の形態音韻的交替における根拠までは、言及されていない。

McCawley（1968）、Tsujimura（1996, 2007）は、表 12 の形態音韻的交替を、規則として定式化した。しかし、これらの先行研究においても、寺村（1984）で言及されなかった、母音/i/ が生じる根拠については説明されていない。

中道（1999）、佐々木（2005）は、表 12 の形態音韻的交替を、最適性理論（Optimality Theory; Prince and Smolensky 1993）によって説明する。

佐々木（2005）が述べるとおり、表 12 の形態音韻的交替は、s 語幹以外において、(60)のように一般化できる。子音語幹とタ系語尾が接続するとき、日本語標準語では許容されない子音連続を回避するため、語幹末子音を、促音 Q にする(60a)、撥音 N にする(60b)、母音 V にする(60c)という、3 通りのいずれかの方法がとられる。

- (60) a. ... (C)VQ -ta
b. [[[... (C)VC]_{語根}]_{語幹} -ta] → ... (C)VN -ta
c. ... (C)VV -ta

² 寺村（1984, 1997）は、本論文と同様、動詞語幹の種類として b 語幹も認めているが、b 語幹のときの形態音韻規則には言及していない。

語幹末子音が/k/, /g/ のとき, (60c)のように母音 V として/i/ が生じる。佐々木 (2005) は, 動詞の時制関連表現 (ここでは非過去形と過去形) は音節数が同じでなければならないとする, 韻律的単一性制約があるとする。また, 上位の制約として, 語幹末子音に対する軟口蓋性の指定の変更を禁じる制約があるとする。以上の制約を守るために, (60a)の促音便化や(60b)の撥音便化はせず, /k/, /g/ を削除し, 母音/i/ が生じると分析している。

語幹末子音が/s/ のときは, 語幹末子音が変化する(60)とは異なり, 動詞語幹と接辞との間に母音/i/ が生じる。これについて, 中道 (1999), 佐々木 (2005) は, 歯擦性や継続性を持つ/s/ が保持されることを要求する制約によって/s/ が保たれ, 日本語標準語において許されない子音連続を避けるために/i/ が挿入されると分析している。

しかし, 日本語標準語において許されない子音連続を避けるためであれば, 挿入されるのは/i/ 以外の母音でも差し支えないはずである。このときに, 他の母音ではなく/i/ が挿入されることを音韻的に予測・説明することができない。

以上のように先行研究は, s 語幹のときに, 母音/i/ が生じることの正当性を説明していない。

6.4.2.2. 本論文における分析

本節では, § 6.4.2.1. で述べた先行研究の問題点を, 自律分節音韻論 (Autosegmental Phonology) を用いた非線形音韻論 (Non-linear Phonology) によって解決する。

表 12 に示した形態音韻的交替を説明する, これまでの先行研究では, 音素列の線形順序において, 隣接する音素同士だけが形態音韻的交替を生じるという, 線形音韻論 (Linear Phonology) 的な考え方を前提としていた。これに対して本論文では, 隣接しない音素同士も形態音韻的交替を生じることが可能な, 非線形音韻論 (Non-linear Phonology) の考え方をを用いて形態音韻規則を設定し, 表 12 の形態音韻的交替を説明する。

最初に, これまでの研究において前提とされてきた, Linear Phonology 的な考え方に基づく規則によって, 表 12 の形態音韻的交替を説明する。特に, 子音語幹にタ系語尾が後接するときに母音が生じる, 語幹末が/k/, /g/, /s/ の場合において, その生じる母音が語幹拡張母音であるかどうかを検討する。

語幹末子音が/k/, /g/ のときに生じる母音は, 語幹拡張母音ではないと分析する。語幹末子音が/k/, /g/ のときに生じる母音/i/ は, § 6.4.2.1. で取り上げた佐々木 (2005) によると, 母音は/i/ である必要性があることになる。従って, この母音/i/ は語幹拡張母音ではなく, 語幹末子音/k/, /g/ が交替したものであると分析する。

語幹末子音が/s/ のときに生じる母音は、語幹拡張母音であると分析する。§ 6.4.2.1. で取り上げた、中道 (1999)、佐々木 (2005) が設定する制約を守るためであれば、挿入される母音は、/i/ 以外でもよいはずであり、/i/ である必要性はない。母音として/i/ が挿入される正当性を、説明することができない。従って、s 語幹とタ系語尾との間に生じる母音/i/ は、タ系語尾が要求する語幹拡張母音であると分析する。

以上の議論を踏まえると、タ系語尾が子音動詞語幹に後接するときの形態音韻的交替は、(61)にまとめられる。

(61) 以下の規則が、a→b の順に適用される

- a. 語幹末が/n/, /m/, /g/, /b/ のとき、タ系語尾の頭子音/t/ が有声化して、/d/ となる
- b. 語幹末が/k/, /g/ のとき、それらが/i/ に交替する
語幹末が/s/ のとき、タ系語尾が語幹拡張母音/-i/ を要求する
語幹末が/m/, /b/ のとき、それらが/n/ に交替する
語幹末が/r/, /w/ のとき、それらが/t/ に交替する

(61)の形態音韻規則は、s 語幹のときだけ、タ系語尾が語幹拡張母音を要求するという、形態構造が異なる分析となる。このように、s 語幹だけ別の振る舞いをすることを、積極的に支持する証拠が見つからない。

以下では、全ての語幹末子音において、語幹拡張母音/-i/ によって拡張語幹を形成することを前提とし、Non-linear Phonology の枠組みによって形態音韻規則を設定することで、この問題を解決する。

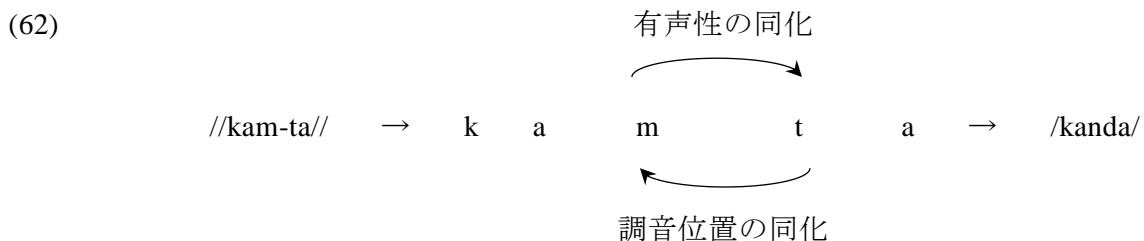
本節では、表 14 に示すように、タ系語尾が子音語幹に接続するとき、語幹末子音にかかわらず、タ系語尾は語幹拡張母音/-i/ を要求する、と設定する。

表 14. 子音語幹とタ系語尾//*-ta*// の接続における，基底形と表層形

	基底形		表層形
k 語幹	// <i>kak-i-ta</i> //	→	/ <i>kaita</i> /
s 語幹	// <i>kas-i-ta</i> //	→	/ <i>kasita</i> /
t 語幹	// <i>kat-i-ta</i> //	→	/ <i>katta</i> /
n 語幹	// <i>sin-i-ta</i> //	→	/ <i>sinda</i> /
m 語幹	// <i>kam-i-ta</i> //	→	/ <i>kanda</i> /
r 語幹	// <i>kir-i-ta</i> //	→	/ <i>kitta</i> /
w 語幹	// <i>kaw-i-ta</i> //	→	/ <i>katta</i> /
g 語幹	// <i>kag-i-ta</i> //	→	/ <i>kaida</i> /
b 語幹	// <i>tob-i-ta</i> //	→	/ <i>tonda</i> /

表 14 に示した基底形から，どのような形態音韻規則によって表層形が実現するかを，Non-linear Phonology の枠組みを用いて論じる。

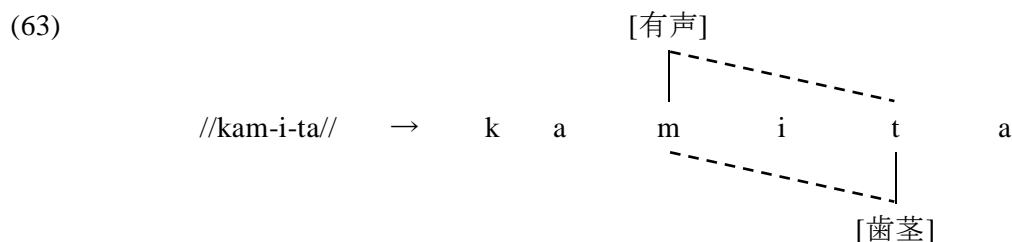
前述したように，表 12 の形態音韻的交替を説明する規則は，(62)に示すとおり，音素列の線形順序において，隣接する音素同士だけが形態音韻的交替を生じるという，Linear Phonology 的な考え方を前提としていた。



しかし，表 14 に示したとおり，タ系語尾が子音語幹に接続するときに語幹拡張母音/*i*/を要求する場合，基底形にその母音/*i*/が存在するため，(62)のような，Linear Phonology 的な考え方によっては，基底形から表層形を導くことができない。

そこで以下では，隣接しない音素同士も形態音韻的交替が可能な，Non-linear Phonology の考え方によって，表 14 に示した基底形から表層形を導く形態音韻規則を設定する。

(62)の形態音韻的交替を，Non-linear Phonology の考え方によって，(63)に簡潔に示す。



(63)は、/m/ のもつ素性[有聲] が/t/ に同化する規則と、/t/ の調音位置に関する素性[齒茎] が/m/ に同化する規則を示している。このように、Non-linear Phonology を用いることで、隣接しない音素同士の形態音韻的交替の規則を設定することが可能になる。

(64)は、以下で前提とする、Non-linear Phonology の図式である。

(64)	Skeletal tier	C _i	V	C _j
	Feature tier	[− voice]	[+ high]	[− voice]
		[− labial]	[− low]	[− labial]
		[− dorsal]	[− front]	[− dorsal]
		[+ strident]		[− strident]
		[− nasal]		[− nasal]
		[− approximant]		[− approximant]

Non-linear Phonology では、(64)のように、2 つ以上の tier とよばれる層を設定する。本論文では tier として、Skeletal tier と Feature tier を用いる。

Skeletal tier とは、分節音が、子音 (C) か母音 (V) かを表示する tier である。

Feature tier とは、分節音それぞれに対して指定されている素性 (feature) の値を表示する tier である。本論文で設定する素性を、以下で導入する。

日本語標準語における 9 種類の語幹末子音を、表 15 にまとめる。

表 15. 子音語幹の語幹末子音

	両唇	齒茎	軟口蓋
破裂音	b	t	k g
鼻音	m	n	
弾き音		r	
摩擦音		s	
接近音	w		

本論文では、有声性、調音位置、調音方法に関する素性を、表 16 に示す 6 つに設定する。9 種類の語幹末子音は、それぞれの素性においてその有無を指定され、その素性の有無の集合（素性の束；feature bundle）として規定される。表 16 に、9 種類の子音におけるそれぞれの素性の有無をまとめる。なお、本節において[] 内に示すのは、設定する素性である。

表 16. 子音語幹の語幹末子音と素性

	k	g	s	t	r	w	n	m	b
voice	—	+	—	—	+	+	+	+	+
labial	—	—	—	—	—	+	—	+	+
dorsal	+	+	—	—	—	—	—	—	—
strident	—	—	+	—	—	—	—	—	—
nasal	—	—	—	—	—	—	+	+	—
approximant	—	—	—	—	+	+	—	—	—

Skeletal tier にある、 C_i は語幹末子音の素性と、 V はタ系語尾が要求する語幹拡張母音/i/ の素性と、 C_j はタ系語尾の頭子音/t/ の素性と、それぞれ連結（associate）する。実際は、それぞれの素性ごとに、Skeletal tier の C_i 、 V 、 C_j と連結するが、本論文では基本的に、(64) のように簡略化して、1 本の連結線（association line）によって表示する。

この連結について、s 語幹//kas-//「貸す」を例に示したのが、(64)である。語幹//kas-// に過去//-ta// が後接するとき、//kas-i-ta// となり、これが基底形となる。なお、s 語幹には、以下で設定する規則が適用されないため、基底形と表層形が同じである。

表 14 に示した形態音韻的交替が生じるのは、動詞語幹末子音、語幹拡張母音/i/、タ系語尾の頭子音/t/ である。そのため、以下に示す Skeletal tier において、この 3 つ以外の分節音は表示しない。

以下に、設定する形態音韻規則を示す。示す順に規則を適用させる。

【規則 i】

C_i が [+voice][−approximant] のとき, C_i のもつ [+voice] を, C_i に拡張 (spread) する

この規則は、先行する音の影響によって後続する音が変化する、順行同化（progressive assimilation）である。

(65)

C_i V C_j

└───┬──────────┘


[−approximant] [+voice]

【規則 ii】

C_i が [+dorsal] のとき, C_i とその素性との連結を, 全て削除する

この規則は、§ 6.4.1.1. で示した、イ音便の成立という、通時的な変化を反映したものである。

(66)

C_i	V	C_j
		
[+dorsal]		
[α voice]		
[−labial]		
[−strident]		
[−nasal]		
[−approximant]		

【規則iii】

C_i が [−dorsal][−strident] のとき, V とその素性との連結を, 全て削除する

この規則は、§ 6.4.1.3. , § 6.4.1.4. で示した、促音便、撥音便の成立という、通時的な変化を反映したものである。

(67)

C_i	V	C_j
\downarrow	\downarrow	
$[-\text{dorsal}]$	$[+\text{high}]$	
$[-\text{strident}]$	$[-\text{low}]$	
	$[-\text{front}]$	

【規則 iv】

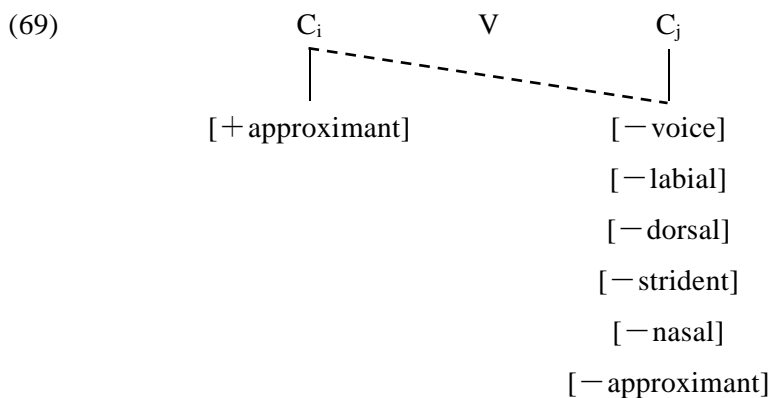
C_i が [+approximant] のとき, C_i のもつ素性を全て, C_j に拡張する

この規則は, 後続する音の影響によって先行する音が変化する, 逆行同化 (regressive assimilation) である。

【規則 iii】によって V が削除されたため, $C_i C_j$ の子音連続が生じる。日本語標準語において許容される音素連続をつくるためには, (68)の 2 つの方法がある。

- (68) a. C_i と C_j を同じ音素にする
b. C_i を, 尾子音の /n/ にする

仮に(68b)の方法をとると, C_i は /t/ であるため, (4a)に示した, 鼻音に後接する無声阻害音を回避する制約 *NC に反する。従って, (68a)のとおり, C_i と C_j を同じ音素に同化する規則が働く。



【規則 v】

C_i が [+labial][−approximant] のとき, C_i を鼻音化し, C_j の調音位置を C_i に拡張する

この規則は, C_i を鼻音化した後, C_j の調音位置を C_i に逆行同化させる。

【規則 iii】によって V が削除されたため, $C_i C_j$ の子音連続が生じる。日本語標準語において許容される音素連続をつくるためには, 前述した(68)の 2 つの方法がある。

仮に(68a)の方法をとると, C_i は【規則 i】によって /d/ であるため, (4a)に示した, 有声阻害音の連続を回避する制約 *DD に反する。従って, (68b)のとおり, C_i を尾子音の /n/ にする規則が働く。

(70)

C_i V C_j

[+labial]

[−approximant]

[−labial]

[−dorsal]

[+nasal]

以上で設定した規則が、どのように適用されるのか、表 17 にまとめる。

表 17. 子音語幹とタ系語尾//*-ta*// の接続における, 形態音韻規則の適用

	基底形	i	ii	iii	iv	v	表層形
k 語幹	//kak-i-ta//	NA	kaita	NA	NA	NA	/kaita/
s 語幹	//kas-i-ta//	NA	NA	NA	NA	NA	/kasita/
t 語幹	//kat-i-ta//	NA	NA	katta	NA	NA	/katta/
n 語幹	//sin-i-ta//	sinida	NA	sinda	NA	NA	/sinda/
m 語幹	//kam-i-ta//	kamida	NA	kamda	NA	kanda	/kanda/
r 語幹	//kir-i-ta//	NA	NA	kirta	kitta	NA	/kitta/
w 語幹	//kaw-i-ta//	NA	NA	kawta	katta	NA	/katta/
g 語幹	//kag-i-ta//	kagida	kaida	NA	NA	NA	/kaida/
b 語幹	//tob-i-ta//	tobida	NA	tobda	NA	tonda	/tonda/

(NA: Non-Applicable)

タ系語尾が子音語幹に接続するとき、語幹末子音にかかわらず、基底においてタ系語尾が語幹拡張母音 /-i/ を要求するとし、以上で設定した、Non-linear Phonology による形態音韻規則によって、表層形の実現を説明することが可能である。

7. 動詞の転成名詞化，転成名詞の複合

本章では，いわゆる動詞連用形を含む名詞について，その連用形の形式がどのように形成されるかを論じる。

西尾（1961: 63）は，動詞連用形が構成要素として含まれる名詞を，(71)のように形式的に分類している。なお，§ 6.1. で述べた不定形は，動詞連用形の形式であるが名詞ではないため，(71)には含まれない。

- (71)
- a. 単純動詞に対応（例：構え，遊び）
 - b. 複合動詞に対応（例：受け入れ，組み立て）
 - c. 動詞連用形＋動詞連用形，複合動詞と対応無し（例：売れ行き，切り売り）
 - d. 動詞連用形＋動詞連用形，並列関係（例：売り買い，貸し借り）
 - e. X＋動詞連用形（例：雪解け，ねじ回し，首巻き）
 - f. 動詞連用形＋名詞（例：干し草，届け先，飛び地）

(71a)については § 7.1. で，(71b)については § 7.2. で，(71c-f)については § 7.3. で，それぞれ論じる。

7.1. 単純動詞の転成名詞化

本節では，(71a)のように，単純動詞が名詞になるときの構造を論じる。

単純動詞が名詞になるときの構造は，(72)(73)のように分析する。

- | | | | | |
|------|----|---|----|---|
| (72) | a. | <i>kamaeru</i>
kamae-ru
構える-NPST
「構える」【母音語幹】 | b. | <i>kamae</i>
kamae
構える.NMLZ
「構え」 |
|------|----|---|----|---|

- | | | | | |
|------|----|--|----|---|
| (73) | a. | <i>asobu</i>
asob-ru
遊ぶ-NPST
「遊ぶ」【子音語幹】 | b. | <i>asobi</i>
asob-i
[遊ぶ-THM].NMLZ
「遊び」 |
|------|----|--|----|---|

単純動詞が名詞になるときの構造は、(72)のように動詞が母音語幹のときは、その語幹がそのまま名詞になると分析する。一方、(73)のように動詞が子音語幹のとき、語幹拡張母音/-i/ が後接し、それによって形成された拡張語幹が名詞になると分析する。

単純動詞が名詞化するときの形式は、§ 6.1. で扱った、不定形と同じ形式である。しかし、それとは異なる形態構造であると分析する。

例として、母音語幹//kamae-//「構える」、子音語幹//jom-//「読む」について、名詞形の構造分析を(74a)(75a)に、不定形の構造分析を(74b)(75b)に、それぞれ示す。

- | | | | | |
|------|----|---------------|----|----------------|
| (74) | a. | <i>kamae</i> | b. | <i>kamae</i> |
| | | <i>kamae</i> | | <i>kamae-Ø</i> |
| | | 構える.NMLZ | | 構える-INF |
| | | 「構え」【名詞形】 | | 「構え、」【不定形】 |
| (75) | a. | <i>jomi</i> | b. | <i>jomi</i> |
| | | <i>jom-i</i> | | <i>jom-i-Ø</i> |
| | | [読む-THM].NMLZ | | 読む-THM-INF |
| | | 「読み」【名詞形】 | | 「読み、」【不定形】 |

(74a)(75a)は、項の位置に立てるという統語的な振る舞いを考えると、(74b)(75b)の動詞とは異なり、名詞であることがわかる。(74a)の母音語幹の名詞化は、語幹がそのまま名詞化しているものと分析できる。これと並行的に、(75a)の子音語幹の名詞化においても、語幹拡張母音/-i/ によって拡張語幹が形成され、それがそのまま名詞になっていると分析することが合理的である。つまり、この分析をとると、動詞の名詞化は、母音語幹のときも子音語幹のときも、動詞語幹をそのまま名詞化する操作と捉えられる。

一方、(75a)の/-i/ を名詞化接辞として設定する分析も考えられる。このとき、母音語幹のときと子音語幹のときとで名詞化の方法が異なることになり、しかもこの説明においては名詞化接辞という形態素が1つ余分に必要となる。記述の経済性の観点から、この分析は前段落における分析に比べて不利となる。

従って、名詞形は、(74a)(75a)のように、母音語幹のときは、語幹が名詞化し、子音語幹のときは、語幹拡張母音/-i/ によって形成された拡張語幹が名詞化すると分析する。

この分析により、名詞形と不定形のアクセントの違いを説明することが可能である。江畑 (2013) が指摘するように、(75a)の名詞形のアクセントは尾高型、(75b)の不定形のアクセントは起伏型になる。このように、動詞の名詞形と不定形において、異なるアクセン

トをもつ動詞が存在する。

日本語標準語の単純動詞のアクセントは、非過去形において、(76)に示す 3 つのパターンがある。

- (76) a. アクセント核が、存在しない（例：貸す，借りる，眠る，遅れる）
 b. アクセント核が、語末から 2 モーラ目にある（例：受ける，育つ，調べる）
 c. アクセント核が、語末から 3 モーラ目にある（例：入る，通る，帰る）

名詞形と不定形のアクセントは、非過去形のアクセントパターンによって異なる。それをまとめると、表 18 のようになる。

表 18. 名詞形と不定形のアクセント核

	非過去形	名詞形	不定形
(76a)	なし	なし	なし
(76b)	−2 モーラ目	−1 モーラ目	−2 モーラ目
(76c)	−3 モーラ目	−1 モーラ目	−3 モーラ目

表 18 のとおり、非過去形のアクセント核が、語末から 2 モーラ目、3 モーラ目の動詞であれば、名詞形と不定形のアクセント核の場所が異なる。(75)のような分析をすると、このように、名詞形と不定形で、同じ形式であるがアクセント核が異なる点を、構造の違いに表すことが可能である。

(72)(73)に示したとおり、単純動詞が名詞になるとときには、動詞が転成名詞化している。

「品詞の転成」について、宮島（1980: 425-426）は、その範囲について、(77)の 3 つの説があるとする。(77a)から、範囲が狭い順である。

- (77) a. ほかの要素をつけ加えず、語形変化の体系や文中の機能が変わる場合
 （例：流れ【動詞連用形】→流れ【名詞】，全体【名詞】→全体【副詞】）
 b. 接尾辞がつくことによる品詞の転換も含む場合
 (77a)の例も、ゼロ接尾辞がついたものとして含む
 （例：広い→広げる，広さ）
 c. 複合の一部分も含む場合
 （例：運動→運動する，うっかり→うっかりする）

(72)のように、母音語幹の単純動詞が名詞化するときは、(77a)の範囲における「転成」

である。(73)のように、子音語幹の単純動詞が名詞化するとき、(77b)の範囲における「転成」である。上述したとおり、母音語幹の単純動詞が名詞化するときにも、ゼロ形態素による名詞化とは分析せず、語幹が名詞化すると分析する。以下では、(72)(73)のような品詞の転換を、「動詞の転成名詞化」という。

7.2. 複合動詞の転成名詞化

本節では、(71b)のように、複合動詞が名詞になるときの構造を論じる。複合動詞が名詞になるときの構造は、(78)(79)(80)(81)のように分析する。

- | | | | | |
|------|----|---|----|---|
| (78) | a. | <i>ukeireru</i>
uke+ire-ru
[受ける+入れる]-NPST
「受け入れる」
【母音語幹+母音語幹】 | b. | <i>ukeire</i>
uke+ire
[受ける+入れる].NMLZ
「受け入れ」 |
| (79) | a. | <i>kumitateru</i>
kum-i+tate-ru
[組む-THM+立てる]-NPST
「組み立てる」
【子音語幹+母音語幹】 | b. | <i>kumitate</i>
kum-i+tate
[組む-THM+立てる].NMLZ
「組み立て」 |
| (80) | a. | <i>toziku</i>
tozi+kom-ru
[綴じる+込む]-NPST
「綴じ込む」
【母音語幹+子音語幹】 | b. | <i>toziku</i>
tozi+kom-i
[[綴じる+込む]-THM].NMLZ
「綴じ込み」 |
| (81) | a. | <i>kasidasu</i>
kas-i+das-ru
[貸す-THM+出す]-NPST
「貸し出す」
【子音語幹+子音語幹】 | b. | <i>kasidas</i>
kas-i+das-i
[[貸す-THM+出す]-THM].NMLZ
「貸し出し」 |

複合動詞が名詞になるときの構造は、(78)(79)のような、複合動詞の後部要素が母音語幹のとき、複合動詞全体の語幹が名詞化する。一方、(80)(81)のような、複合動詞の後部要素が子音語幹のとき、複合動詞全体の語幹に語幹拡張母音/-i/ が後接して形成された、拡張語幹が名詞化すると分析する。このように、(78)(79)(80)(81)は、複合動詞を転成名詞化している。

(79)(81)のとおり、複合動詞の前部要素が子音語幹のとき、それは語幹拡張母音/-i/ によって拡張語幹を形成している。この前部要素は、§ 7.1. で論じた、動詞の転成名詞であるという分析も考えられる。

(79)(81)の前部要素において、動詞の転成名詞化の構造を仮定すると、前部要素が名詞語幹となる。しかし、(79a)(81a)のように、(79b)(81b)に対応する複合動詞が存在する。複合動詞は、§ 7.2. で論じたとおり、動詞語幹と動詞語幹との複合であるため、前部要素が名詞語幹となるこの分析は採用せず、(79b)(81b)は、(79a)(81a)の転成名詞化であると分析する。

7.3. 転成名詞の複合

本節では、(71c,d)の動詞連用形+動詞連用形、(71e)の X+動詞連用形、(71f)の動詞連用形+名詞によって形成された、名詞の構造を論じる。

(71c,d)のように、動詞連用形+動詞連用形による名詞の構造は、(82)(83)(84)(85)のように分析する。

(82) *agesage*
 age+sage
 [上げる.NMLZ]+[下げる.NMLZ]
 「上げ下げ」【母音語幹+母音語幹】

(83) *dasiire*
 das-i+ire
 [[出す-THM].NMLZ]+[入れる.NMLZ]
 「出し入れ」【子音語幹+母音語幹】

(84) *kakehiki*
 kake+hik-i
 [駆ける.NMLZ]+[引く-THM].NMLZ]
 「駆け引き」【母音語幹+子音語幹】

- (85) *jomikaki*
 jom-i+kak-i
 [[読む-THM].NMLZ]+[[書く-THM].NMLZ]
 「読み書き」【子音語幹+子音語幹】

動詞連用形+動詞連用形による名詞は、前部要素も後部要素も、動詞が転成名詞化した後、それぞれの名詞語幹が複合して、複合名詞を形成すると分析する。このように、動詞連用形+動詞連用形による名詞は、2つの動詞の転成名詞が複合することによって形成される、複合名詞である。

前部要素、後部要素のそれぞれにおける動詞の転成名詞化は、§7.1. で論じたように、母音語幹のときは、その語幹がそのまま名詞化し、子音語幹のときは、語幹に語幹拡張母音/-i/ が後接することによって形成された、拡張語幹が名詞化する。

§7.2. で論じたように、前部動詞と後部動詞が複合動詞を形成し、その複合動詞が転成名詞化するという分析も考えられる。しかし、(82)(83)(84)(85)に対応する複合動詞は存在せず、複合動詞の形成を想定する必然性がない。従って、(82)(83)(84)(85)は、前部動詞の転成名詞と、後部動詞の転成名詞の複合であると分析する。

(71e)のような、X+動詞連用形による名詞や、(71f)のような、動詞連用形+名詞による名詞の構造も同様に、動詞連用形の要素は動詞の転成名詞であると分析する。前者の構造は(86)に、後者の構造は(87)に、それぞれ示す。

- | | |
|--|---|
| <p>(86) a. <i>tamaire</i>
 tama+ire
 玉+[入れる.NMLZ]
 「玉入れ」【母音語幹】</p> | <p>b. <i>nezimawasi</i>
 nezi+mawas-i
 ねじ+[[回す-THM].NMLZ]
 「ねじ回し」【子音語幹】</p> |
| <p>(87) a. <i>todokesaki</i>
 todoke+saki
 [届ける.NMLZ]+先
 「届け先」【母音語幹】</p> | <p>b. <i>hosikusa</i>
 hos-i+kusa
 [[干す-THM].NMLZ]+草
 「干し草」【子音語幹】</p> |

「～する人」を意味する/te/ や、「～する方法」を意味する/kata/ は、通時的に分析すると、従来は、(87)のように複合名詞であったものが、前接する動詞の選択制限が弱くなり、それぞれの形態素が接辞化していると考えられる。

- (88) a. *kakite*
kak-i-te
[[書く-THM].NMLZ]-手
「書き手」
- b. *kakikata*
kak-i-kata
[[書く-THM].NMLZ]-方
「書き方」

8. 対立する従来の分析との比較検討

本章では、ここまで論じてきた語幹拡張母音分析と対立する、従来の分析を取り上げ、それと語幹拡張母音分析を比較検討する。従来の分析は採用せず、語幹拡張母音分析を採用することを論じる。

8.1. 対立する分析の概要

本章で取り上げる、語幹拡張母音分析に対立する分析は、いわゆる未然形や連用形とされてきた形式を認めるといふ、従来の国文法における分析である。

この分析において、いわゆる未然形や連用形の形式は、屈折接辞を取らない語幹形式である、という特徴をもつ。以下に、この分析のメリットとデメリットを述べる。

8.2. 対立する分析のメリット

第一に、§ 8.1. で述べたとおり、いわゆる未然形や連用形の形式は、屈折接辞を取らない語幹形式である、という特徴をもつ。子音語幹//kak-//「書く」の、否定形/kakanai/、希求形/kakitai/ は、この特徴によって説明できる。否定形/kakanai/ における/kaka-/、希求形/kakitai/ における/kaki-/ は、屈折接辞を取る語幹ではなく、否定接辞//-na//、希求接辞//-ta//をとることにより、品詞転換して形容詞語幹になると分析できる。

第二に、§ 6.1. で扱った、子音語幹//kak-//「書く」の、同時形/kakinagara/、/kakitutu/、不定形/kaki/ など、従属節を形成する副動詞（non-finite verb）について、いわゆる連用形の形式を認めると、/kakinagara/、/kakitutu/、/kaki/ は屈折していないと分析することとなる。副動詞の特徴として、通常の文末動詞に比べて屈折の特徴を持たないという位置付けは、通言語的に一般的である。この分析は、その位置づけに合致する分析である。

第三に、全ての連用形の形式を、同じ機能として考えることが可能である。いわゆる連用形が出現する環境を、谷口（2006）や、（鈴木（1972）、澤西（2003）などを整理した）田川（2008）を参考にまとめると、(89)のようになる。

- (89) a. 取り立て詞に前接（例: 書きはする, 書きすらする）
b. 一部のいわゆる助動詞や接続形式に前接【第 6 章冒頭】
（例: 行きます, 帰りたい, 泣きそうだ, 見ながら）

- c. 従属節の形成【§ 6.1.】（例: 試合に負け引退した）
- d. 複合動詞の前項【§ 6.2.】（例: 食べ過ぎる, 乗り遅れる, 読み始める）
- e. 動詞の転成名詞化【§ 7.1. , § 7.2.】
（例: 遊び, 泳ぎ, 踊り, 食べ過ぎ, 降り始め）
- f. 複合名詞の前項・後項【§ 7.3.】
（例: 入れ知恵, 置き手紙, 小走り, 高笑い, 読み書き, 読み書き）
- g. 動詞句や動詞そのものに付加し, 範疇を変化させる接尾辞に前接【§ 7.3.】
（例: 書き方, 担い手）

いわゆる連用形の形式を認めることで, より抽象的なレベルにおいて, (89)の全ての形式に共通して, 「動詞らしさ」を減少させる *deverbalization* という機能があると, 分析することが可能になる。

8.3. 対立する分析のデメリット

本論文では, § 5.1. で論じたように, 子音始まりの接辞が子音語幹に接続するとき, 接辞の頭子音が脱落すると分析する。一方, 対立する従来の分析では, 子音始まりの接辞が母音語幹に接続するときにおいても, 未然形や連用形を形成する（本論文の分析では, 語幹拡張母音によって拡張語幹を形成する）ことになる。このような分析は, § 4.1. で取り上げた, Shibatani (1990) の分析とほぼ等しい。§ 4.1. で論じたように, 子音語幹の未然形に, 子音始まりの接辞が接続するとき, その接辞の基底形の頭から 1 モーラが脱落するが, そのことを正当化できない。

動詞「書く」の過去形/*kaita*/ について, § 6.4. で論じたような, //*kak-i-ta*// という基底構造であるとは分析できない（これは, いわゆる連用形の形式に, 屈折接辞//*-ta*// が後接することと同じである）。//*kak-i-ta*// という構造は, 屈折接辞//*-ta*// を取っており, 「屈折接辞を取らない語幹形式」という, 連用形の形式の特徴に反するためである。/*kaita*/ の形態構造を分析するためには, § 6.4.2.1. で述べたとおり, 表 13 のような, タ系語尾が後接するときの語幹を別に設定するか, § 6.4.2.2. で述べたとおり, 語幹に直接タ系語尾が後接するとし, 形態音韻規則を設定せねばならない。この分析を採用したとしても, タ系語尾が *s* 語幹に後接するときに生じる, 母音/*i*/ を説明することができない。

以上の点において, いわゆる未然形や連用形を認める, 従来の分析は採用せず, 語幹拡張母音分析を採用する。

9. おわりに

本論文では、日本語標準語の子音語幹動詞の形態構造について、動詞語幹と接辞のどちらに属するかが問題となる、母音/a/, /i/ を分析した。問題の母音について、接辞に属するとする分析は採用できないことを指摘し、動詞語幹と接辞を接続する、独立した形態素として分析し、それは語幹拡張母音 (thematic vowel) であることを論じた。

9.1. 日本語形態論における本論文の位置づけ

本論文では、動詞語幹と接辞のどちらに属するかが問題となる、母音/a/, /i/ について議論してきた。これについて、(14)で示した2つの分析方法がある。(14a)は、接辞の頭母音として解釈する分析である。(14b)は、動詞語幹と接辞を接続する、独立した形態素であると解釈する分析である。どちらを採用するかについては、第4章で述べたように、日本語形態論の研究において議論されてきた。

(14a)の分析によって、日本語の動詞複合体について論じる風間(1992:259)は、(14a)と(14b)のどちらの分析を採用するかに関して、「活用をどう考えるかに関する古来議論の絶えない問題である」とした上で、「別の観点からは、当然、別の体系も考えられよう」と述べる。

しかし本論文では、(14a)の分析は採用できず、(14b)の分析が優れているという、両者の分析の妥当性を明確に論じることで、日本語形態論の研究における問題を解決した。

9.2. 今後の展望

本論文では、日本語標準語の動詞の形態構造において、線形順序において屈折接辞よりも前方である、動詞語幹の構造を扱った。

下地(2015:174)は、「語幹に次々と接辞や付属語、補助動詞が膠着」していく、「動的・漸次的・回帰的なプロセス」が、日本語の動詞形態論の特質であると指摘する。今後の展望として、そのようなプロセスによって形成される、語やそれよりも大きな用言複合体を分析することで、日本語標準語の動詞屈折形態論を記述する。

参考文献

- Bickel, Balthasar and Johanna Nichols (2007) Inflectional morphology. In: Timothy Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description III*, 169-240. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bloch, Bernard (1946) Studies in colloquial Japanese I Inflection. *Journal of the American Oriental Society* 66(2): 97-109.
- Bybee, Joan L. (1985) *Morphology: A study of the relation between meaning and form*. Amsterdam: John Benjamins.
- 土井忠生 (1935) 『近古の国語』国語科学講座第4巻. 東京: 明治書院.
- 江畑冬生 (2013) 「統語法から見た日本語動詞の活用体系」『人文科学研究』133: 1-19.
- Grundt, Alice Wyland (1978) The functional role of the Indo-European theme vowel. *Pacific Coast Philology* 13: 29-35.
- Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims (2010) *Understanding morphology*. London: Hodder Education.
- 服部四郎 (1950) 「附属語と附属形式」『言語研究』15: 1-26.
- 糸井寛一 (1964) 「九重町方言の動詞の語形表」『大分大学学芸学部研究紀要』2(4): 28-54.
- Ito, Junko and R. Armin Mester (1995) Japanese phonology. In: John A. Goldsmith (ed.) *The Handbook of Phonological Theory*, 817-838. Oxford: Blackwell.
- 出雲朝子 (1980) 「再びラ行四段活用動詞の音便形について」『青山学院短期大学紀要』34: 69-96.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京: ひつじ書房.
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』東京: くろしお出版.
- 風間伸次郎 (1992) 「接尾型言語の動詞複合体について: 日本語を中心として」宮岡伯人(編)『北の言語: 類型と歴史』241-260. 東京: 三省堂.
- Kibrik, Aleksandr E. (1991) Organizing principles for nominal paradigms in Daghestanian languages: Comparative and typological observations. In: Frans Plank (ed.) *Paradigms: the economy of inflection*, 255-274. Amsterdam: John Benjamins.
- 清瀬義三郎則府 (1971) 「連結子音と連結母音と —日本語動詞無活用論—」『国語学』86: 42-56.
- 小林隆 (1995) 「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」『東北大学文学部研究年報』45: 242-266.
- 国立国語研究所 (2017) 『日本語歴史コーパス 奈良時代編 I 万葉集』(短単位データ 1.0 / 長単位データ 1.0) https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/nara.html

- Lehman, Christian (2004) Interlinear morphemic glosses. In: Geert Booij, Christian Lehmann, Joachim Mugdan and Stavros Skopeteas (eds.) *Morphology. An International Handbook on Inflection and Word Formation 2, 1834-1857*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Lichtenberk, Frantisek (1983) *A grammar of Manam*. Hawaii: University of Hawaii Press.
- Lieb, Hans-Heinrich and Sebastian Drude (2000) *Advanced glossing: A language documentation format*. Berlin: Technische Universität.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 改訂版』 東京: くろしお出版.
- McCawley, James (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
- 三上章 (1955) 『現代語法新説』 東京: 刀江書院.
- 宮島達夫 (1980) 「語構成」 国語学会 (編) 『国語学大辞典』 423-427. 東京: 東京堂出版.
- 宮岡伯人 (2002) 『「語」とはなにか エスキモー語から日本語をみる』 東京: 三省堂.
- 宮岡伯人 (2015) 『「語」とはなにか・再考 一日本語文法と「文字の陥穽」』 東京: 三省堂.
- 中道尚子 (1999) 「最適性理論による日本語の動詞活用分析」 日本言語学会第 119 回大会口頭発表. 神戸松蔭女子学院大学, 1999 年 11 月 28 日.
- ナロク, ハイコ (1998) 「日本語動詞の活用体系」 『日本語科学』 4: 7-30.
- 西尾寅弥 (1961) 「動詞連用形の名詞化に関する一考察」 『国語学』 43: 60-81.
- 奥村三雄 (1968) 「サ行イ音便の消長」 『国語国文』 37(1): 34-48.
- 大倉浩 (1995) 「狂言記にみるサ行四段動詞のイ音便形」 『文芸言語研究・言語篇』 27: 156-168.
- Prince, Alan and Paul Smolensky (1993) *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. Boulder: Rutgers University and University of Colorado.
- 迫野虔徳 (1971) 「カ行イ音便の形態的定着」 『語文研究』 31/32: 113-124.
- 佐々木冠 (2005) 「日本語動詞形態論における韻律的単一性」 日本言語学会第 130 回大会口頭発表. 国際基督教大学, 2005 年 6 月 12 日.
- 佐々木冠 (2012) 「現代日本語標準語における未然形」 日本言語学会第 144 回大会口頭発表. 東京外国語大学, 2012 年 6 月 16 日.
- 佐々木冠 (2016) 「現代日本語における未然形」 庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己 (編) 『日本語文法研究のフロンティア』 21-42. 東京: くろしお出版.
- 澤西稔子 (2003) 「動詞・連用形の性質」 『日本語・日本文化』 29: 47-66.
- Shibatani, Masayoshi (1990) *The languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 下地理則 (2008) 「伊良部島方言の動詞屈折形態論」 『琉球の方言』 32: 69-114.
- Shimoji, Michinori (2008) *A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language*. Doctoral dissertation, Australian National University. [published in 2017]
- 下地理則 (2013) 「グロス付けにおける具体的な方策と問題点」 ワークショップ 日本の消

- 滅危機言語のグロスを考える. 国立国語研究所, 2013 年 6 月 29 日.
- 下地理則 (2015) 「工藤真由美著『現代日本語のムード・テンス・アスペクト論』『日本語文法』 15(2): 167-175.
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 東京: むぎ書房.
- 鈴木重幸 (1989) 「動詞の活用形・活用表をめぐって」言語学研究会 (編)『ことばの科学 2』 109-134. 東京: むぎ書房.
- 鈴木重幸 (1996) 『形態論・序説』 東京: むぎ書房.
- 田川拓海 (2008) 「分散形態論による活用への統語論的アプローチ —現代日本語における動詞連用形の形態統語論的分析—」『筑波応用言語学研究』 15: 59-72.
- 谷口秀治 (2006) 「動詞連用形の用法について」『大分大学国際教育研究センター紀要』 3: 57-66.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 東京: くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1997) 「現代日本語 文法」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)『言語学大辞典セクション 日本列島の言語』 242-260. 東京: 三省堂.
- Tsujimura, Natsuko (1996) *An Introduction to Japanese Linguistics*. Oxford: Blackwell Publishers.
- Tsujimura, Natsuko (2007) *An Introduction to Japanese Linguistics*. Second edition. Oxford: Blackwell Publishing.
- 築島裕 (1978) 『平安時代語新論』 東京: 東京大学出版会.
- 柳田征司 (2010) 『日本語の歴史 1 方言の東西対立』 東京: 武蔵野書院.
- 柳田征司 (2015) 『日本語の歴史 5 下 音便の千年紀』 東京: 武蔵野書院.
- 依田恵美 (2005) 「中央語におけるサ行四段動詞イ音便の衰退時期をめぐって」『待兼山論叢・文学篇』 39: 17-31.
- 渡辺己 (2014) 「形態論入門」日本言語学会 2014 年度夏期講座. 名古屋大学, 2014 年 8 月 18-23 日.

謝辞

本論文を執筆するにあたり、以下に記す、多くの方々に大変お世話になりました。深く感謝いたします。

指導教員である下地理則先生は、丁寧に手厚く指導してくださいました。テーマ決定から執筆の最終段階まで、数え切れないほど何度も面談してくださいました。また、言語調査や学内外での研究発表の機会を、数多く作ってくださいました。

研究室の先生方である、久保智之先生、上山あゆみ先生、太田真理先生は、講義や演習などといった授業中のみならず、授業後の質問から研究室での雑談にいたるまで、多くのことをご指導くださいました。

研究室外の先生方にもお世話になりました。東京外国語大学の風間伸次郎先生、中川裕先生には、本論文の内容に関する発表に、貴重なコメントをいただきました。また、神戸松蔭女子学院大学の黒木邦彦先生には、音便の通時的变化とその研究方法についてご教授いただきました。その他にも、言語学以外の講義や、研究会などでお会いする先生方との議論によって、多くのことを学びました。

所属ゼミを問わず、研究室の皆さんには、日々多くの場面で助けていただきました。先輩の皆さんは、私が困ったときに、いつも適切なアドバイスをくださいました。同期の皆さんは、頼りない私のことを、いつも温かく見守ってくださいました。後輩の皆さんは、いつも鋭い質問を私に投げかけ、一緒に考えてくださいました。

研究室外の先輩、同期、後輩の皆さんにも、たくさん励ましていただきました。

以上のように、本当に多くの方々のお陰で、本論文を執筆することができました。深く感謝いたします。ありがとうございました。

最後に、勝手気ままに生きている私を、何も言わずいつも支えてくださる家族に、心から感謝申し上げます。